

モロッコ紀行 2023



2023年3月

旅のチカラ研究所 植木圭二

アフリカ大陸の北西端のモロッコに旅行会社のツアーに参加して夫婦で行ってきた。モロッコは実に刺激的な国で、コロナで3年ぶりの海外旅行になったこともあって感動の連続だった。

第一章 モロッコへ

■久しぶりの国際便

モロッコに向かう飛行機は卒業旅行の若者たちが多く乗っており、ほぼ満席だ。私の隣の席には妻が座り、その隣には同じツアーの女性客が座って2人は楽しそうに話をしている。

私はというと映画鑑賞に徹することにした。何しろ成田からドバイまで12時間、ドバイからモロッコのカサブ兰卡まで9時間もかかり、乗り継ぎ時間も入れると24時間にもなるからだ。



【モロッコまでの地図】

そして次々に映画を観る。映画は国際線の機内なので英語でも日本語でも観ることができる。

TOMBI Father and Son (とんぴ 父と子)、The Blue Skies at Your Feet (君が落とした青空)、Elvis (エルビス・プレスリー) Yes I Can't swim (私は泳げません)、etc…。どれも面白かったが、これから旅が始まるのだから映画のコメントはやめておこう。

■カサブランカ

長時間のフライトの末、ようやくモロッコのカサブランカに到着する。長旅の疲れもいとわず旅行会社がチャーターした大型バスに乗って市内観光に出かける。今回のツアー参加者は全部で20人、大型バスの座席を1人2席使っても空席がある。

成田空港から同行してきた添乗員が挨拶をする。コロナのために4年ぶりのモロッコだと言っている。彼女は年の頃ならアラフォー、スレンダーな女性だ。そして現地ガイドも運転手もモロッコ人男性で多分40代だろう。この面々に連れられてモロッコ各地を巡るバスの旅が始まる。

カサブランカは大都市だ。道は整備されておりトラムも走っている。人口約400万人、モロッコ最大の商業都市だが首都ではない。モロッコの人口は約3600万人なので、この国はカサブランカー都市集中型と言っていいだろう。

カサブランカといえば映画「カサブランカ」が有名だが、ガイドは「あの映画は、カサブランカでは撮影されておらず、全てアメリカのハリウッド、それもほとんどスタジオ撮影ですよ」と言っている。私はそれを聞いて、完全にイメージが壊れてしまった。逆に映画が与えるイメージやメッセージは侮れないということかもしれない。

私たち一行は市内を散策する。噴水のある「ムハンマド5世広場」には鳩がたくさんいる。その奥にある裁判所の建物にはベルベル文字とアラビア文字が併記されているとガイドが教えてくれる。

ベルベル？ 私はこの言葉を世界遺産検定受験の時に覚えたが一般的には知られていない。

ベルベル人は北アフリカ一帯に古くから住み、アラブ人が多数を占めるようになった現在も文化的独自性を維持する先住民だ。

尚、ベルベル文字は英語と同じで左から書き、アラビア文字はご存知のように右から書く。



【ムハンマド5世広場 背後に裁判所】



【左がベルベル文字、右がアラビア文字】

大昔、アフリカ北部のこの一帯はベルベル人が住んでいた。そしてフェニキア、カルタゴ、ローマ帝国などに侵略され、8世紀にアラブ人がイスラム教と共にやって来てほぼ現在の姿になった。その後もヨーロッパ列強の植民地になるが、独立してモロッコ王国になった。

ベルベル文字もアラビア文字も併記されているから2つの民族は共存しているのだろう。ただし宗教はイスラム教一色のようなのだ。

そのイスラム教のモスク（教会）が街はずれの大西洋の面した場所にある。

「ハッサン2世モスク」だ。巨大なモスクで、敷地内で8万人、建物内で2万5千人が同時に礼拝できる。さらにモスク中央の緑色の屋根の部分は開閉式になっているというからまるで野球場のようだ。ミナレット（尖塔）の高さは200mもあるという。

私はこんなに高いミナレットは今まで見たことがないとガイドに言うと、ガイドは世界一高いミナレットだと誇らしげに答える。

このモスクは1993年完成というからモスクにしてはかなり新しい。しかしその堂々とした姿から威厳や歴史を感じられる。歴史が威厳を作るのか、いや威厳が歴史を作るのだろう。もっと言えば人々の思いや祈りが重なり威厳になり、歴史を作っていくのだろう。



【ハッサン2世モスク ミナレットの下に見える緑の屋根の部分が開閉する】

■首都ラバト

カサブランカを後にしてバスは東に向かっている。モロッコを時計回りに一周するようだ。大西洋沿岸を約100km東に移動し首都ラバトに着く。ラバトは人口約65万人の政治の街で、モロッコは王国なので王宮もある。モロッコの政治経済はカサブランカとラバトという北部の大西洋沿岸に集中している。おそらくこの辺りがモロッコでは住みやすい地域なのだろう。

バスは王宮に続く真っ直ぐな道を走っており、やがて王宮の門が現れる。門の中にも綺麗な道が延々と続いている。



【王宮に続く道 奥に王宮の門が見える】



【王宮の門 奥に道が続き宮殿が見える】

ガイドの案内でラバトの市内を散策する。まずは「ウダイヤのカスバ（要塞）」とメディナ（旧市街）に案内される。

カスバやメディナという言葉は初めて聞く人も多いと思うが、世界遺産検定でも時々出題されているので、私は何となく覚えていた。カスバは要塞、メディナは旧市街のことで、この地域では一般的にそう呼ばれている。それはイタリアに行くと大聖堂のことをドゥオーモと呼んでいるのと同じだ。

ウダイヤのカスバの入口はトム・クルーズ主演の映画「ミッションインポッシブル」で撮影に使われた場所だとガイドが教えてくれる。何と階段を自動車が走って降りて行くシーンをガイドがスマホで見せてくれる。



【ウダイヤのカスバ 映画ではこの階段を車で降りた】

門をくぐりメディナの中に入る。メディナは城壁に囲まれており、その城壁の一角にカスバが充てられているという造りになっている。メディナの中の道は結構入り組んだ迷路になっており、旧市街なのでモスクや商店、人々が住む一般の住宅も多くある。その住宅の壁は白く塗られており、比較的綺麗になっているが、壁には窓がない。

住宅の玄関ドアからニョキッと手が出ている。ガイドが「この手の形をしたドアノッカーを知っていますか？」と聞いてくる。するとツアー客の誰かが「ファティマの手」と答える。ガイドは「よく知っていますね」と驚きを隠せない。

ガイドの説明ではファティマとは、イスラム教の預言者ムハンマドの娘で生涯を社会奉仕に捧げた女性で、イスラム教における理想の女性とされている。そのファティマの左手は災いを払い魔除けとされ幸運を呼び込むと言われている。さらに指輪をしているファティマの手の家は既婚者の家だと説明する。

すると誰かが「それじゃ個人情報になってしまうよ」と言うと、一同、どっと沸く。



【ファティマの手のドアノッカー】

私はそのことを知らなかったが、ただ良く考えると家を持つのは大概結婚してからだから、この指輪説はどうも合点がいかない。そもそもイスラム教徒に結婚指輪の習慣があるのだろうか。ちなみに指輪をしているドアノッカーは全て右手になっており、指輪は中指にはめられている。

そんな話をしていると、オバサン 1 名が遅れてやってくる。1 人でツアーに参加してきた人で、いつも一番後ろで写真を撮っている。迷子にならなければと心配になる。

メディナから少し外れた場所にフランスから独立を勝ち取った元国王「ムハンマド 5 世の霊廟」がある。独立は 1956 年というから私が生まれた年で、モロッコは意外に新しい国だと知る。しかし同い年なのに私は若くはない。国家と人間は寿命が違うから比べることに無理があるのか。

国王の霊廟なので門には馬に乗った衛兵がいる。その門をくぐると霊廟があり、同じ敷地に「ハッサンタワー」と呼ばれる 12 世紀のミナレットがある。ガイドの説明ではこの塔は未完成で本来ならば 88m になるはずだったが、44m で工事が中断されたという。

新旧 2 つの建造物が並び建っている様は多少違和感があるが、あと数百年もするとどちらも古い建造物だと言われて何の違和感もなくなるだろう。多くの遺跡は一時代で終わらず歴史の積み重ねで現代に至っている。



【ムハンマド 5 世の霊廟の入口 奥が霊廟】



【霊廟と同じ敷地のハッサンタワー】

■動物と料理

ラバトから内陸に入ると平原が続き、限り無く平らな大地が広がる。こんな光景は日本ではまず見られないだろう。そして砂糖キビ畑があり農業用水路がある。茶褐色か灰色のイメージのアフリカ大陸だが、意外に緑が多い。牛、羊など 20 頭とか 30 頭とか小規模な単位で放牧している。もちろん豚はいない。イスラム教では豚は不浄の動物で飼うことも食べることもない。

地元民がロバに荷物を乗せて歩いている。あるいは人間もロバの上に乗っている。日本では今や見かけない光景だが、ここでは至る所で日常的に見ることができる。

人間と家畜と役畜（荷役の動物）が実にバランスよく共同生活をしている。そしてその距離が実に近いことが私の驚きでもある。

レストランに立ち寄る。タジン鍋を並べて調理しており、この鍋で作る料理をタジン料理と呼んでいる。タジン鍋は私の家にもあるが、蓋が円錐形をしており、この形状によって野菜に含まれる水分を利用して肉や魚を蒸し焼きにする。水が貴重なこの地域には適しており、土鍋なので直接火にかけられる。

モロッコがローマ帝国に支配された紀元前 2 世紀に陶器が伝わってから 1000 年くらいかけてこの形の鍋になったとガイドが説明してくれる。

鍋の中身は牛肉、羊肉で、鍋が並んだカウンター横には動物の原形を半分残しながら肉がぶら下がっている。先ほどの放牧されていた動物たちを思い出す。



【タジン鍋】

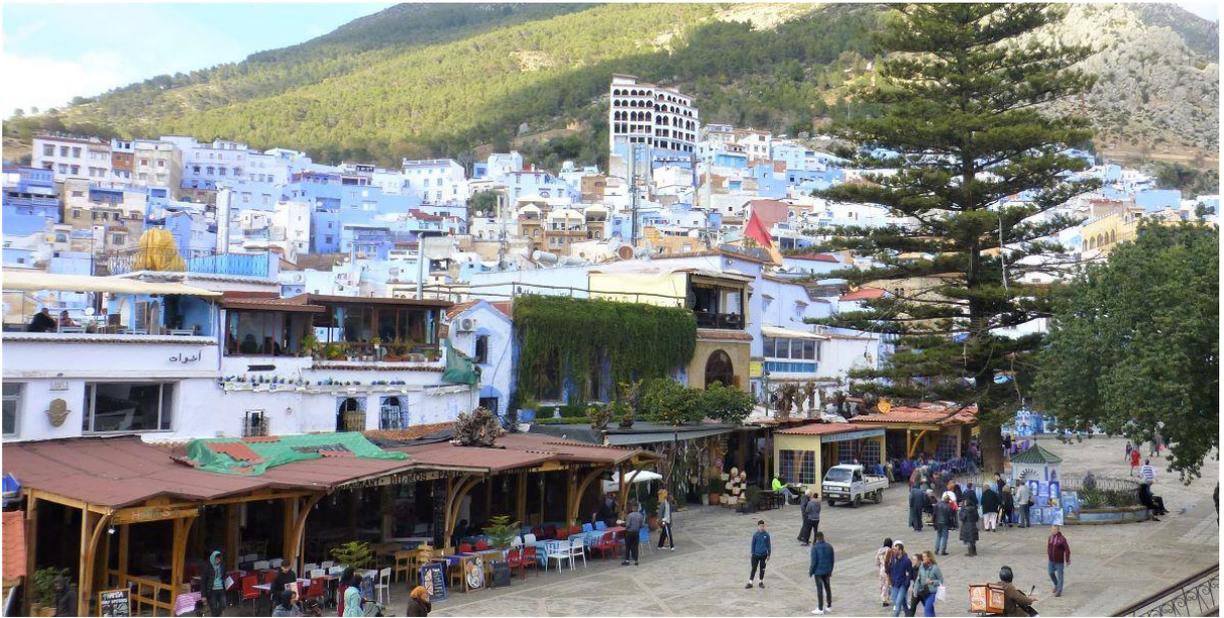


【動物の肉】

第二章 青い街、迷路の街

■青い街シャウエン

バスはさらに東に進み地中海に近づき、山の斜面にへばりつくように広がる「シャウエン」にやって来る。今回のツアー名称は「青い街シャウエンに泊まるエキゾチックモロッコ 10 日間」というもので、私はこの“青い街”という言葉にワクワクしている。



【シャウエンの街 広場から見たメディナ】

私たちはその青い街の中を散策する。青い街は建物の下部半分あるいは建物全体を青く塗っていることで成り立っている。細部を見ると青い部分に花などのアクセントをつけた建物もある。

ツアー客たちは、青が綺麗な家の前で写真を撮っている。モロッコに来て2日目、そろそろ打ち解けてきたようでお互いに写真を撮り合うなどしている。ツアー客の誰と話をしても旅のベテランばかりで、世界各地の大概の観光地に行っている。



【シャウエンの街の青い建物】

ガイドの話では、この青い街が目されるようになったのは最近のことで、最初は街全体ではなく特定の建物だけ青かった。青はイスラム教では神聖なものを意味するから塗ったらしい。しかし誰かがそれをインスタグラムで紹介して話題になって、青は各建物に広まった。だから観光名所としては日が浅い。しかし街は15世紀頃にできたというから、それなりに古い。その頃の日本は戦国時代か。そんな時代の建物が当たり前のように残っている。



【左が今回泊まったホテル プールや椅子が見える 右は眼下の街並み】

“青い街シャウエンに泊まる”がメインテーマのツアーだから、今宵泊まるホテルはメディナの中心地にある。自由時間が多くとってあり、ツアー客の多くは街の散策に出かける。私も出かけようとしたら、ホテルの玄関で偶然にも添乗員と会ったので、少しの時間だが面白そうなので添乗員と話をする。

他愛ない話から始まり、コロナで添乗の仕事がない時どうしていたかを聞くと、彼女は「コロナ患者をホテルに隔離する仕事をしていました、何しろホテルに案内するのは慣れていましたから」と言っている。なかなかウイットに富んだ答えだ。

彼女はソツがなさそうなので、私はそんな彼女の失敗談を聞きたくなり、まずは私が水を向けてみる。今から 30 年以上も前のことだが、私の友人の添乗員がパリのモンマルトルの丘でバスを降りて観光していて、運転手がちょっと離れた隙にバスを盗まれた話をする。

すると彼女も「私も盗まれました」と吐露する。「海外のホテルで自分の部屋のベッドで横になっていたら眠ってしまい、気が付いたら財布や書類の入ったバッグが全部なくなっていました。ホテルのセキュリティの問題だとクレームをつけたけど、ドアに鍵を掛けずに開けたまま眠ったあなたの責任ですと言われた」と言っている。

その後のことを聞くと「帰りの航空券はセーフティボックスに入れていたので難を逃れましたが、それ以外はダメでした」と付け加えた。以降彼女は不用意に眠らないのと内鍵をかけるようになったという。

一方私は海外のホテルのセーフティボックスは取り出せなくなることを恐れてあまり使用したことがない。これは見直すべきなのか。

■イスラム教の教え

翌日のバスの中でガイドがイスラム教について説明してくれる。

まずは一夫多妻制のことで、正妻は4人まで認められている。イスラム教ができた頃はユダヤ教やキリスト教という異教徒との聖戦（ジハード）が常態化しており、多くの男たちが死んだ。その結果女たちが余り、残った男たちは彼女らの面倒をみて子孫を増やし、国を繁栄させないといけなかったからだと言う。

何となく理にかなっている。ただ今は昔に比べれば平和な時代になった。

正妻の中でも第一婦人の権限が他の3人よりも強く、第二婦人以降との結婚は第一婦人がチェックして彼女の目にかなった人だけが結婚できるという。従って第一婦人を筆頭に女社会が出来る。ちなみに第一婦人との結婚は両親がチェックするとガイドは付け加えた。

ツアー客の誰かが「なぜ4人なの？」と聞くと、ガイドは「ムハンマドの妻が4人だったから」と答える。別の誰かが「ガイドさんは、何人妻がいますか？」と聞くと、「私はベルベル人なので一夫一婦で・・・」とお茶を濁した。

1000年以上の時を経て、ベルベル人の伝統的家族制度は維持しているようだ。

イスラム教で興味深いのはラマダンだ。約1カ月間のラマダン期間は日出から日没までいっさいの飲み食い禁じている。そうする理由は、世の中には食べることができない人々も大勢いるので、その気持ちを理解しなさいというものだという。これもまた理にかなっている。

■迷路の街

バスは南下して古都「フェズ」にやって来る。そしてフェズ専門の現地ガイドと合流する。何故ここだけ別の現地ガイドが必要なかと多少の疑問を持ちつつも、スキンヘッドで長身の明るいキャラのガイドはなかなか楽しい男だ。

彼は、フェズは世界一複雑な迷路の街だと言う。

私たちはその迷路を体験すべき、ガイドに連れられてメディナ入口の「ブージェールド門」をくぐり迷路の街に入る。ガイドは「私から離れないように、私の頭を目印について来て下さい」と言っている。確かに長身の彼のスキンヘッドは灯台のように良い目印になっている。まさかこの頭だけで彼がこの街のガイドになったとは思えないが、その答えは徐々に分かってくる。



【ブージェールド門】



【メディナの中 スキンヘッドの現地ガイド】

道は狭く、確かに迷路だ。曲がる所を間違えるとすぐに迷子になりそうだ。この狭い道にも荷役のロバがいて、荷物を運んでいる。狭い道の両脇には様々な店がある。肉、魚、青果、衣料品、皮製品、調度品、土産物、どれも小さいながらも一国一城の主が一所懸命に働いていて、誰も悲壮感なく和気あいあいと仕事をしている。



【メディナの中の乾燥果実の店】



【メディナの中の陶器店】

路地を歩いていると何ともいえない臭いがしてくる。生活臭に加えて、料理を作る香ばしい匂い、家畜の臭い、それらが混ざった複雑な臭いになっている。

肉屋では牛や羊の生肉を売っており、皮を剥いた体の半身が吊るされている。羊の頭だけが台の上に置かれたおり、何となくこちらを見ているのがおどろおどろしい。

ガイドに案内されて革製品販売店に入り、店の屋上に登る。彼はこの店とも個人的に繋がりがあようだ。途中の階段で何故かミントの葉を1枚もらう。

屋上に出ると何か臭い。先ほどまでの臭いと全く違う経験したことがない強烈な臭いがする。見える景色は洗濯物がたくさん干されていて、洗濯をする浴槽のようなものも並んでいる。

しかし、よく見ると干されているのは洗濯物ではなく、動物の皮だ。牛や羊の皮を剥いでそれを洗って干している。その臭いが強烈で、あのミントの葉はこの臭いを打ち消すために嗅ぐためのものだった。



【屋上から見た干場 洗った動物の皮を洗って干している】

私はミントの葉を嗅ぎながらガイドの説明を聞く。この街の歴史や皮から革への加工方法などを熱心に話してくれる。

丸や四角のいくつもの洗濯槽や染色槽が並んでいる。ガイドは 600 年前の洗濯機があると指差すので、その指の先の方を見ると深くて大きな洗濯槽がある。その下に直径 2m くらいのドラムがあると言っている。これは凄い。600 年前というと日本は戦国時代か、そういえばシャウエンの街もその頃にできたことを思い出した。

モロッコの建物は石やレンガでできているので日本の建物よりも耐久性があるから単純に古いものが残っていると考えたが、洗濯機となると話は別だ。明らかに文化水準が高かったようだ。



【洗濯槽と染色槽 左の四角い深い箱が 600 年前の洗濯機】

階下の革製品販売店で買い物をして、再び迷路に戻る。

迷路から隠れるように「ブーイナニア神学校」がある。その神学校に入り、ガイドから説明を受けている途中でツアー客が 1 人いないことが判明する。いつも一番後ろで写真を撮っているあのオバサンらしい。添乗員が慌てて捜索に出る。

待つこと 10 分くらいか、添乗員と一緒にあのオバサンが入ってきた。

オバサンは開口一番「誰も助けてくれない！」とやや怒っている。彼女は「周りに人がいなくなったが誰も声もかけてくれず、現地の人も誰も助けてくれない」と言っている。

私は啞然としてしまった。イヤホンガイドの声を無視して自分が撮影に夢中になって 1 人遅れたのに、何を言っているのだろう。まずは「お騒がせしました、すみませんだろう」と私は心の中で叫んだ。しかしそれでも添乗員はやさしくフォローしている。

民家に案内される。ガイドの知り合いの普通の民家で、その家の主人がミントティーを振る舞ってくれる。

単にミントティーをいれるだけでなく、ポットの説明から始まり、そのポットを 1m くらい上

に持ち上げて湯を注ぐ。テレビ番組「相棒」の杉下右京役の水谷豊が紅茶を入れるシーンを思い出す。そして最後は打楽器を取り出して簡単な演奏もしてくれる。

それら一連のパフォーマンスは日本語のジョークも交えて行われ、そのジョークにツアー客たちはどっと沸いて喜んでいる。おそらくスキンヘッドの地元ガイドが教えたのだろう。いつも同じジョークでも、言う人は毎回練習をして、聞く人は初めてなので抜群に受けがいい。

笑いの後は、家の中を見物させてくれる。イスラム教では女性は外部の人に顔を見せないのので外には窓がない。代わりに家の真ん中に吹き抜けの空間があって、空間の上はガラス張りなので明るい。その空間を囲むように内窓のある部屋が配置され、3階建ての家になっている。

ラトバで初めてメディアの中を歩いた時に住宅に窓がなかったことを思い出した。

モロッコの民家がどんなものなんかが良く分かるこの企画はなかなか面白い。



【ミントティーパフォーマンス】



【吹き抜けの空間を上から見る】

■ホテルでトラブル

フェズのホテルはなかなか良いホテルだが、トラブル発生だ。

私たちの部屋のバスタブの栓がない。添乗員はお客が持って帰ることがあると言っていたが、どう考えても持ち帰るものではなく意図的に置いていないように思える。

欧米人は湯を張らずにシャワーだけで済ませることが多い。従って栓がなくてもクレームにならない。ホテルにとっても水は貴重で、敢えて要求されるまで栓を出さないといい方が良さだろう。そうするとクレームをつけて栓を受け取ったお客は次のホテルでも使うために栓を持って行ってしまふ。栓が無くなるのは痛手だが、それほど水は貴重ということだろう。

食事の時に頼んだ飲み物の支払いで、ボーイが釣銭をごまかそうとした。

私の隣に座った同じツアーの女性客の支払いは 70DH (ディラハム) だったので 100DH をボーイに渡した。しかし釣銭は 3DH しかない。10DH も 1DH も似たコインなので分からないと思ったのだろう。

もちろん彼女は納得していない。ボーイは立ち去ろうとしたが、私もつたない英語で加勢してクレームをつけた。それでもボーイはごまかそうとしている。すると今までおとなしそうにしていた彼女が豹変して「ちょっとあんた～、いい加減にせえや、あたしゃ 100DH 渡したのに何でこれしか釣銭があらへんのや」と、大阪弁でまくし立てた。やや大きな声だったので周囲の人も驚いている。一番驚いたのはボーイで、直ぐに 30DH を置いて私たちの前から姿を消した。

私は常々世界で一番通じる言葉は大阪弁だと思っていたが、奇しくもここで実証された。

ライオンの中では一番大きいというバーバリライオンの石像がある。バーバリライオンは別名アトラスライオンといい、かつてこの地域で生息していた。現在は絶滅危惧種になっている。



【イフレンの街並み 三角の屋根が目にとまる】

■山越え

アトラスシダーと呼ばれる背の高い木が立ち並ぶ地域に入ってくる。シダーの日本語訳は杉なので、ツアー客の何人かは杉花粉を気にしている。ガイドは「日本の杉はヒノキ科ですが、アトラスシダーはヒマラヤ杉と同じ本当のスギ科なので花粉症は大丈夫でしょう」と説明する。

アトラスシダーの木々の下では地元の人たちが観光客相手にタジン料理を振舞う簡単な休憩所を作って商売をしている。私たちは緑の木立が気持ち良さそうなのでバスから降りて散歩する。どうやら花粉症は大丈夫のようだ。誰かが「悪いのはヒノキか」と言っている。



【アトラスシダーの林】

いよいよ山越えだ。それもアトラス山脈越だから私にとっては初めての経験になり、少し心が躍っていることに気が付く。

添乗員の話では1月に来たツアーでは最短で山が越えられずに時間を掛けて迂回し、別のツアーでは雪でバスが身動き取れずに一晩中バスの中で過ごしたと言っている。

本日は3月4日、既に暖かくなっており、少なくとも山越えは心配なさそうだ。遠くには雪山が見え、ところどころで雪が見え始めて、遊牧民のテントがあって放牧している。



【放牧民と遊牧の様子 右奥の山の手前には雪が見える】

標高 2160m のサード峠でバスを停めて記念撮影に興じる。土産物店はおろか建物も看板もなく、殺風景な峠で何も無い。風は冷たいが、少しピリッとして気持ちが良い。



【サード峠】

バスは砂漠を走っている。砂漠の向こうにはアトラス山脈が真っ白に雪化粧をしている。この組み合わせは実に珍しい。日本でまず見ることはないだろう。



【砂漠の向こうにアトラス山脈の雪山】

途中にあるカスバ風のレストランで昼食をとる。メニューは鱒のホイル焼だ。添乗員は事前に知っていたのだろう、醤油とぼん酢醤油が出てくる。わざわざ日本から持参したというからその心配りに敬服する。誰かが「やっぱり醤油は世界一の調味料だね」と言っている。

■砂漠の中で水が作るもの

日本食風の昼食を食べて再びバスに乗り、気が付くとグランドキャニオンのような場所を走っている。左右には岩の壁、道路の隣には川が流れている。川が大地を浸食して溪谷を作った。

ここは「ズィズ溪谷」で、バスはその真ん中付近の撮影スポットで停まる。私たちがバスを降りて写真を撮っていると物売りが何人も集まってくる。その中には幼い少年もいる。周りに集落はないから遠くから歩いてここまで来たようだ。



【ズィズ溪谷】

バスはしばらく走って「ズィズオアシス」にやってくる。実は、私は生まれて初めて本物のオアシスを見るが、思っていたのと違う。

平らな砂漠にポツンと木々が生い茂る平地があるのだと思っていたが、私たちの目の前にあるオアシスは一段低い窪地になっている。それはむしろ溪谷だ。それも、とてつもなく大きな溪谷でナツメヤシの木々が生い茂っている。このくらいの規模でないと水は直ぐに蒸発してしまい、この地形が砂嵐から守ってくれるのだろう。

この景色を眺めて、アフリカ大陸の砂漠地帯にやって来たという実感が湧いてくる。



【ズィズオアシス】

■モロッコ人の生活

バスがトイレ休憩で停まった時に、私が添乗員にモロッコ人の生活を知りたいと頼んでおいたので、バスの中でマイクを通して添乗員がガイドにモロッコ人のことを根掘り葉掘り聞き始める。

モロッコ人の公務員の平均月収は5万円位、そして年金の平均月額が4万円位だとガイドは言っている。月収に対して意外に年金が高く、日本の国民年金の受給月額に近い。その年金は現在60才からもらえるが政府は延ばそうとしていると、どこかの国とよく似ている。

サッカーがとても盛んで、至る所で子供たちがサッカーをやっている。何しろ昨年のワールドカップでベスト4だったから国中で大騒ぎになって、凱旋パレードは凄かったらしい。そのパレードの動画を見せにわざわざ後方の座席までガイドがスマホを持って見せにくる始末だ。そして現在のモロッコでは日本のサッカー漫画「キャプテン翼」が大人気だと興奮気味に言っている。

■添乗員が走り回る

サハラ砂漠の入口の街「エルフード」のホテルに着く。砂漠の中にポツンとあるようなリゾートホテルで、濁った水のプールもある。プールサイドを通過してナツメヤシの林を抜けて行くと私たちの泊まるコテージに出る。ちょっと古いがこの地域にしては立派と言っている。

私と妻は一旦部屋に入って備品やお湯の出ることを確認してから外に出ると、中庭で缶ビールを飲んでいる同じツアーのおばちゃんたちがいる。

イスラム圏では缶ビールは店で売っていないので日本から持ち込んだという。私も焼酎を持ち込んだが缶ビールは重たいので最初から諦めた。おばちゃんたちは「缶ビールが無くなれば、土産物のスペースができ、重さも丁度いいよ」と言っている。何故かその言葉には説得力を感じる。

この集まりにさらに 3~4 人が加わって、日本から持ってきた乾き物をつまみにプチ宴会が始まる。



【エルフードで泊まったホテル】



【ホテルのコテージ】

しかしそんなことをよそに、方々でトラブルの叫び声が聞こえてくる。鍵が開かない。鍵が内側から掛からない。鍵を内側から掛けたら出られなくなった等々。

それらに対して添乗員が走り回って対応している。鍵を開けるコツを教える、ホテルの従業員を呼ぶ、部屋の交換と様々だ。

鍵のトラブルが片づいたら、今度はお湯が出ないという声が聞こえる。それも全ての部屋らしい。先ほど確認した私の部屋も同様にお湯が出なくなっている。ホテルもお手上げらしく専門家を呼んでいるとの話だ。

結局、お湯のトラブルが治まったのは夕食が終えようとした頃で、添乗員がやってきて「皆さん、お湯が出るようになりましたよ」と嬉しそうな声で言っている。

部屋に戻ってシャワーを浴びると、お湯はしょっぱい。それでも透明なので良としないといけない。先ほど添乗員はお湯のトラブルに触れて、「数年前のことですが、濁ったお湯しか出てこないのです、仕方なく茶色の湯に浸かったことがあります」と話していたからだ。

■月の砂漠

翌朝 4 時 30 分に起きる。早起きの理由は、本日は夜が明ける前にラクダに乗ってサハラ砂漠に行き、砂漠から昇る日の出を見に行くからだ。

そしてモーニングコールの時間になるが、電話が鳴らずにドアをたたく音がする。何とモーニングコールはドアノックで、ホテルのスタッフが各部屋を回ってノックしている。確かに部屋を見渡すと電話機がないので、そうするしかないのだろう。

私は「ドアにファティマの手のドアノッカーを付けて、モーニングコールではなくモーニングノックと呼ぶべきだね」と妻に話すと、妻もうなずいている。

真っ暗な中、迎いの 4WD 車に乗って私たち一行はホテルを出発する。ラクダが待機するラクダステーションに着いたのは 6 時頃、まだ真っ暗で月が出ている。ラクダの乗り方の講習を受けてから、ラクダに乗って出発する。1 人 1 頭にまたがって、ラクダ使いが 2 頭のラクダをロープで繋げて引いて行く。

ラクダは非常におとなしい動物で、声も出さずに黙々と歩きはじめる。その速度は人間が歩くよりも少し早い程度だ。ラクダの背中を挟んだ私の太ももからほんのりとラクダの体温が伝わってくる。朝早く少し寒いので、実に心地よい。



【ラクダに乗った妻と私 右上に満月が見える】

満月が西の空の低い位置に移動するが、東の空はまだ明るくならない。まさしく“月の砂漠”の世界で、「月の砂漠を遥々と旅のラクダが行きました」という歌が聞こえてくるようだ。

月が沈み、今度は星が綺麗に見え始める。しかしそれも束の間、今度は東の空が白んでくる。

この一連のショーは約 30 分間、ラクダの背に乗って揺られながら見られる。これはとても感動的だ。「モロッコ最高！」と心の叫びが聞こえてくる。妻も感動してはしゃいでいる。

■日の出

ラクダから降りて砂山の高い所まで歩いて登って行く。そしてしばらくの間、日の出を待つ。ラクダたちは少し下の平らな砂の上でおとなしく座っている。

日の出を待つ間、ラクダ使いは毛布を敷いてくれて私たち夫婦はそこに腰を降ろす。そして私たちの前に来て、名前を聞いてくる。彼は砂を平らに直して、その上にアラビア文字で私と妻の名前を書いて、その名前を囲んでナツメヤシの木の絵を書き添えてくれる。

彼に英語で質問をすると英語で答えが返ってくる。彼の年齢は 25 才、もっとオッサンかと思っていたが意外に若い。明るくなってきたので顔が良く見えてきて、確かに若くて彫りの深い顔をしている。妻 1 人、子供 1 人いると言っている。



【日の出を待つツアー客たち】



【アラビア文字の名前とナツメヤシの木】

日が昇る。サハラ砂漠が鮮明に見えてくる。どう表現していいかわからないが、大小様々な砂の波があって、それらが丘を造って、その丘が幾重にも重なって遥か彼方まで続いている。

砂はややオレンジ色をしており、陽光を受けてさらに赤みを増して、丘もオレンジ色になっている。ガイドの話ではこれらの砂の丘は移動するという。砂が非常に細かく乾燥しているのでサラサラになっており、風が強いから大量移動もあるのだろう。



【サハラ砂漠】

その砂をペットボトルに詰めてお土産にすべく、私はバッグからペットボトルを取り出す。事前に添乗員が「空のペットボトルを持って行った方が良いでしょう」というアドバイスがあったから、私もツアー客たちもほぼ全員がペットボトルを持参してきた。そしてありがたいことにラクダ使いがペットボトルに砂を入れる作業までしてくれる。

砂を持ち帰る行為は、試合を終えた甲子園球児たちが甲子園の砂を持ち帰るシーンと重なる。ただ甲子園の砂は大会が始まる前にトラックで別の場所から運び込むが、ここの砂は正真正銘サハラ砂漠の砂だ。そしてその砂はオレンジ色で非常に細かい。

日が昇って撤収になる。ラクダ使いは今まで私たちが座っていた毛布をソリにして妻をラクダが待機している場所まで滑らせて運んでくれる。他のラクダ使いたちも同様なことをして、ツアー客の熟女たち（失礼！）は童心に帰ったように喜んでいる。

そしてまたラクダに乗り、ラクダステーションにもどる。途中で朝の陽光を受けたキャラバンの写真をラクダ使いに撮ってもらう。



【私たちのキャラバン 先頭のラクダに乗っているのが私、2番目は妻】

ラクダに乗った私たちキャラバンの影が太陽光を受けて砂の斜面に映し出される。これもまた面白い写真だ。



【キャラバンの影が砂漠に映し出される】

ホテルに戻り朝食になる。日本を離れてすでに6日目になっており、日本食が恋しい時期になっている。そんなことを察知してか、添乗員から味噌汁の差し入れがある。これもわざわざ日本から持ってきてくれたもので実にありがたい。

心憎い気配りに感謝して味噌汁を飲み干す。久しぶりの味噌汁に早起きした体が喜んでいる。

第四章 カスバ街道

■トドラ溪谷

バスはサハラ砂漠を後に西に進み、「ティネリール」という街のレストランで昼食になる。タジン鍋の肉団子と卵の煮込みが美味で、デザートのアレンジも甘くて良かった。

レストランを出ようとした時に、ガイドが「このレストランは昔ここになかったのですが、ある事情である場所から移ってきました」と言っている。

バスは山間の川を遡って上流に向かっていく。兩岸の山がどんどん高くなって、道幅と川幅を合わせて30mくらいまで狭くなってきた。そして間もなく「トドラ溪谷」に到着する。

バスを降りて写真を撮るが、両脇の岩の壁が高過ぎて上手く納まらない。壁は高く、ほぼ垂直にそり立っている。その高さは160mもあるとガイドは言っている。そんな岩壁なので、ヨーロッパからロッククライミングの練習のためにアスリートたちが来るという。

EU 各国のナンバーを付けた車を数台見かける。キャンピングカーもある。地中海をフェリーで渡ってきたようだ。地中海を渡れば意外にヨーロッパは近い。何しろモロッコ北端とスペイン南端の間のジブラルタル海峡の最狭部は14kmしかない。

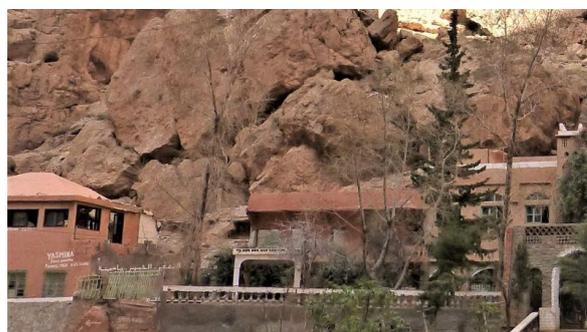
河原にはホテルやレストランがある。しかしどの店も営業をしていない。先ほど昼食を食べたレストランと同じ看板が掛かっているが、大きな岩が落ちて無惨にも建物の一部が潰されている。

ガイドは、この崩落事故によって先ほどのレストランは移転を余儀なくされたと教えてくれた。

ここでバスが出発しようとしても戻って来ない人がある。ガイドと添乗員が探しに行き、ようやく戻ってくる。また例のあのオバサンだ、懲りない人だ。



【トドラ溪谷】



【大きな落石で潰された建物】

■カスバ街道

トドラ溪谷から離れてアトラス山脈の南側をバスは走る。この辺り一帯は大小のカスバが多くあって「カスバ街道」を呼ばれている。つまり昔は戦略的要衝地帯だった。

沿道に満開の桜の木が何本もある。あまりに綺麗なのでバスが停まって花見をすることになるが、ガイドは「これは桜ではなくアーモンドの木ですから」と言っている。花びらも5枚あって、どうみても桜の花だが、良く見るとアーモンドの実がなっている。ツアー客の誰かが「桜もアーモンドどちらもバラ科サクラ属だから親戚と言うよりも兄弟だね」と付け加える。



【アーモンドの花、実もなっている（左の赤丸）】

砂漠の中の真っ直ぐな道をバスがひた走る。横を見るとアトラス山脈が雪化粧をしてそびえている。数日前はこの光景に感激して写真を撮りまくっていたが、今は少し冷静になっている。

冷静な理由は、慣れたことはもちろんのこと、私が数日で少し成長したからだろう。アトラス山脈はアフリカ大陸のどの辺りにあってどのくらいの大きさでどんな人たちが暮らしているかを知り、砂漠についても砂の丘が移動することなど知識が増えている。それらを知って雪山と砂漠を見ると数日前とは感じ方も変わってくる。まあ、それを成長と呼ぶのは少し大袈裟だが、ただその小さな成長が積み重なって旅の思い出になっていく。

■ワルザザードのホテル

カスバ街道の終わりの街「ワルザザード」に到着する。

このツアーの参加者は20人、特徴的なことは夫婦の参加は2組しかいない。それ以外の2人組は女性ペアと父娘ペアで、あとは1人参加という構成になっている。こんなに1人参加の多いツアーは珍しい。

1人参加が多い理由はともかくも、外国のホテルはシングルルームがないので1人参加の場合はツインルームをシングル利用で使う。そのため旅行会社が当初確保した部屋数が足りなくなったらしい。従って本日は5人だけ別のホテルに泊まる分泊になる。

そうすると、私は気配り添乗員の動向が気になる。2つのホテルはそれなりに離れているので行き来できない。何のトラブルも発生しないことを祈るしかない。

■座談会

夕食後、トラブルもなく、ちょっとだけ手が空いた添乗員と話をする時間ができる。

今宵はさらにもう1人加わる。今回のツアー客にはインテリが多く、ニュース番組のコメンテータのような人もいる。そのコメンテータを加えて3人の座談会が始まる。

話題は今回の旅のことから始まり、映画の話、そして最後はウクライナの話になる。どうやったら戦争を終わらせられるのか。

コメンテータが胸をはって「私に任せて下さい。当局に命じてミッションインポッシブルにロシアのプーチンを拉致させますから」とアメリカ大統領のようなこと真面目に言っている。初日に行ったカスバでミッションインポッシブルの撮影が行われたことを思い出したのか。

すると今度は添乗員が「それならば、私のところはMI6（英国の諜報機関）から007ジェームズボンドを出しますよ」と、彼女もまた英国首相きどりだ。

私は「それらがもしも失敗しても、絶対に失敗しない日本の切り札ゴルゴ13を出します」と言うと、2人とも「その手があったか!」と、手を叩いて喜んでいる。コメンテータは「この豪華な3ヒーロー出演の映画はもうどこかでシナリオを書いているかも」と言っている。

■映画の街

添乗員が3人座談会に出席した夜も何事もなく明けて翌日になる。そして2つのホテルで乗客を乗せてバスは出発する。

市内にある「タウリルトのカスバ」を見物する。このカスバと道路を挟んだ反対側に映画博物館がある。中には入らないが、博物館があるほどなのでこの街は映画と関わりが深いらしい。

バスは「オスカースタジオ」にやって来る。入口にはエジプトのラムセス2世の像がある。しかし像の後ろの石柱の上の部分は“張りぼて”で穴が開いている。いかにも映画のセットだ。

この映画スタジオでバットマンやMr.ビーンなども撮影されたのだろう、門にはそれらの絵が描かれている。案内板にはモロッコやエジプトだけでなく、世界各地用のスタジオもあると書かれている。

かつては映画カサブランカがハリウッドで撮影されたが、それが今では逆転して世界各地の映画シーンはモロッコで撮られているのか。



【スタジオ入口のラムセス2世像】

バスは「ティフルトゥのカスバ」にやって来る。ここで映画「アラビアのローレンス」の撮影が行われたとガイドが説明している。

写真に納めようとするすると鉄塔がカスバの後ろにあって邪魔だが、私の持っているガイドブックにはこの鉄塔は写っていない。今の技術では鉄塔を消すことは簡単にできる。ただ私は鉄塔のあるカスバが面白いと思いシャッターを切る。現代においてカスバは要塞としては用を成さないが、テレビ塔や携帯電話の基地局の土台としては用を成している。



【ティフルトゥトのカスバ】

バスに戻ると車内では気配り添乗員の演出だろうか、演歌「カスバの女」が流れている。私は題名だけは知っていたが初めて聞く。普通の演歌では面白くないのでカスバを舞台にしたというから、かなり挑戦的で斬新な作品だったらいい。歌詞を調べたので書いておこう。

♪涙じゃないのよ浮気な雨に ちょっぴりこの頬濡らしただけさ
ここは地の果てアルジェリア どうせカスバの夜に咲く 酒場の女のうす情け
♪歌ってあげましょ私でよけりゃ セーヌのたそがれ臉（まぶた）の都
花はマロニエ、シャンゼリゼ 赤い風車の踊り子の いまさらかえらぬ身の上を
♪貴方もわたしも買われた命 恋してみたとて一夜の火花
明日はチュニスかモロッコか 泣いて手をふるうしろ影 外人部隊の白い服

この歌は 1955 年発表なので私は生まれていない。と言うことは私と同年のモロッコも独立前だ。そんな時代に遥か遠いアフリカのカスバとは恐れ入ってしまう。しかしながら 1 番の歌詞に「どうせカスバの夜に咲く 酒場の女の…」とあるが、イスラム教の国で酒場はないだろう。

■世界遺産アイトベンハドゥ

「アイトベンハドゥ」という小さな街にやって来る。小高い山全体の要塞都市で、幾重もの城壁で囲まれており、頂上には大きな建物があり食料や武器の倉庫になっている。

今まで見てきたカスバは単独の要塞だが、要塞が都市化し大規模なものをクサルと呼ぶ。オアシスに出来たクサルなので川も緑もあって砂漠や山にも隣接しており彼方には雪のアトラス山脈が見える。ここは生活に便利でありながら戦略的要衝だった。

橋を渡り、アイトベンハドゥの内部に入っていく。ここは世界遺産になっているが、入場料は取っていない。モロッコに来て2つの世界遺産を観てきたがいずれも入場無料だ。それは嬉しい反面、管理されていないということで、その証拠にゴミが落ちていても掃除もされていない。世界遺産に対する考え方が日本とはだいぶ違うようだ。



【世界遺産アイトベンハドゥのクサール 背後にアトラス山脈】

要塞なので内部は狭い迷路になっている。それでも所どころ喫茶店や土産物店がある。店番をしているのはこの住民だろうか、のんびりとしている。今までバスが停まる写真スポットに集まってきた物売りたちは何とかして金を稼ごうとしつこかったが、ここではそのようなことは感じられない。世界遺産なので黙っていてもお客が来るからだろう。

頂上に登ると周りの景色も素晴らしい。これだけ良く見えるので要塞の意味があるのだろう。

眼下に広がる砂の平原では映画「グラジェータ 2」を現在撮影しているとガイドが教えてくれる。もちろん世界遺産の区域外だが、格闘シーンの背景にこのクサールが映し出されるのだろう。



【クサールの建物とオアシスと川】



【頂上の倉庫】



【アイトベンハドゥの街】



【砂漠と山、彼方にはアトラス山脈】

ここでまたあの例のオバサンがいない。やはり遅れて最後にやってくる。しかし今回は他の女性客たちと一緒に。どうやらいつも遅れるので彼女たちがフォローしているようだ。その彼女たちが添乗員に目で合図を送っている。添乗員との“あうんの呼吸”での行動らしい。

私はもはやオバサンを責めることを忘れて、この連帯感、親切な人たちに感動してしまう。

世界遺産アイトベンハドゥの見えるレストランで昼食をとる。出てきたのはクスクスという料理で、北アフリカで広く食べられている料理だという。1mm くらいの米粒のようなものが主役の料理で、羊肉や鶏肉と煮込んだ野菜と一緒に盛り付けられて出てくる。そして煮込んだ肉と汁は別に出てくる。



【右がクスクス 左は野菜と一緒に煮込んだ鶏肉が鍋のまま出てきた】

この米粒のようなものをクスクスと呼ぶこともあるとガイドブックには書かれている。粒はパサパサで小麦粉を原料としているので簡単に言えばパスタの一種になる。それゆえ世界最小のパスタとも言われている。

第五章 マラケシュ

■再び山越え

バスはモロッコの観光都市「マラケシュ」に向かうため北上し、再びアトラス山脈の山越えになる。数日前の山越えはモロッコ東部だったが、今度は西部の山越えで、近くにはアトラス山脈最高峰の標高 4167m トゥップカル山がある。従って山は高く、道はかなり険しい。とは言っても私たちはバスに乗っているだけなので何の苦労もない。むしろ車窓からの景色は素晴らしい。

標高 2260m のティシュカ峠にやって来る。空気は澄んでいて険しい雪山からの風がヒンヤリとして冷たい。その雪山の麓から一本の曲がりくねった道（winding road）が続いている。

私はその道を眺めていたらビートルズの名曲「The Long and Winding Road」を思い出した。



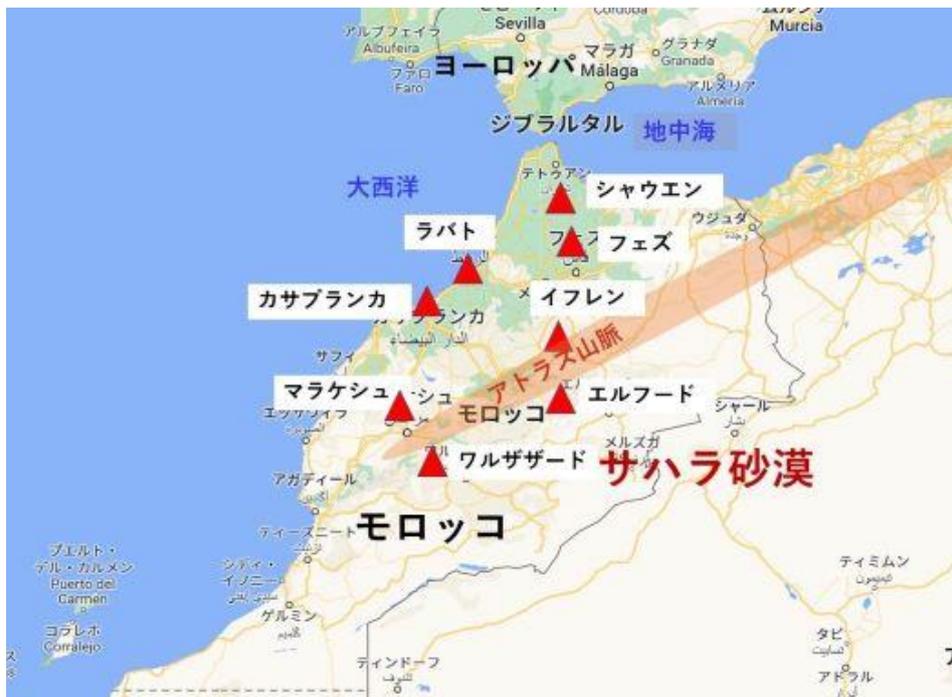
【ティシュカ峠からの眺め】

峠を過ぎてアルガンオイルの店に立ち寄る。アルガンオイルはアルガンの木の種から得られる油で、アルガンの木はモロッコのこの地域でのみ自生している。店の説明によるとアルガンの木は地中深く、7m 以上も根を伸ばし、1 年以上雨が降らなくても枯れない。この脅威の生命力が人体に多くの効能を与える。美肌効果はもちろん、若返り効果や抗炎症効果も期待できると、まるで不老不死の万能薬のようだ。

従って非常に人気があり、このアルガンオイル目当てにモロッコに来たというツアー客もいて、女性陣は目の色を変えている。私も妻もその勢いに推されて購入する。

■かつての首都、モロッコの縮図

アトラス山脈を越えて「マラケシュ」にやって来る。マラケシュはアトラス山脈を背後にしてモロッコのほぼ中央に位置し、かつての首都で歴史文化が集約してエネルギッシュな人々が集まっている。それゆえモロッコの縮図とも呼ばれている。

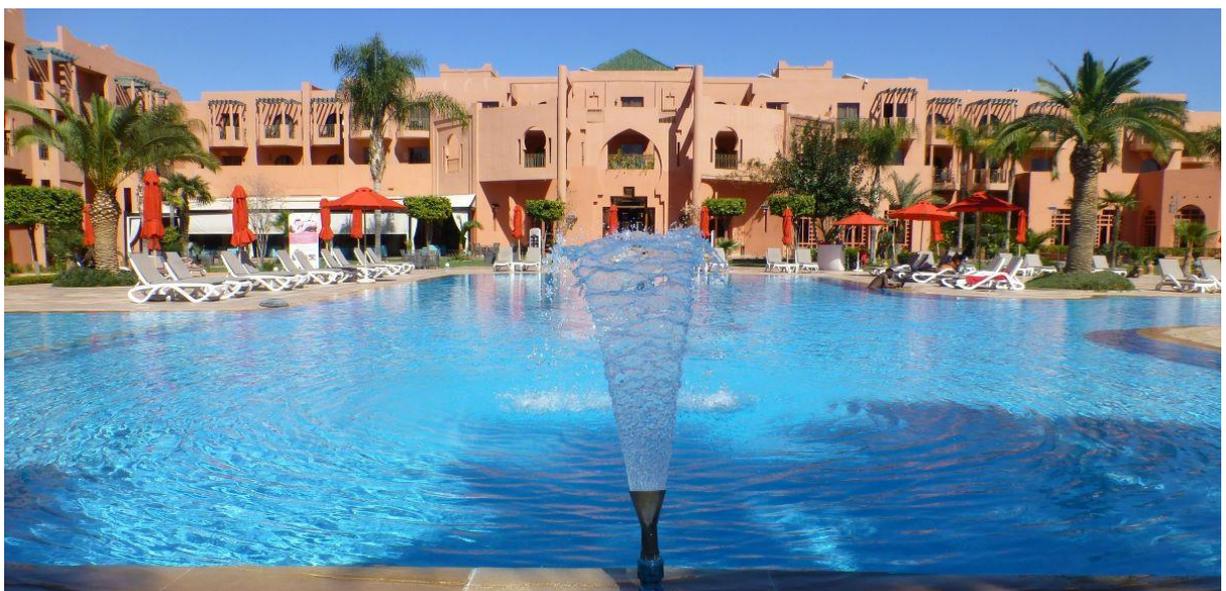


【ここまでモロッコで巡ってきた都市】

マラケシュは標高 450m の平地にあって、約 100 万の人々が暮らしている。比較的緑が豊かな土地で一般的なアフリカのイメージからは遠い。

緑といえば、モロッコに来て初めてゴルフ場を見る。日本のゴルフ場とは全く異なりグリーンは小さくフェアウェイも狭い。基本は砂地なので池はない。だから池ポチャもない。その代わりにバンカーばかりかもしれない。これは結構手ごわそうだ。

マラケシュは観光都市でもありホテルも充実している。ここで私たちが泊まるホテルは 5 つ星、大きなプールもあり今回の旅では最も格調高い。



【ホテルとプール 手前は噴水】

私が今まで参加してきた海外ツアーでは、最後に一番良いホテルに泊まることが多い。それは当然のことかも知れないが、今回もそれにたがわず格調高いホテルで、このホテルに連泊する。

ホテルの直ぐ近くに大きなスーパーマーケットがあり、あらゆるものが手に入る。今まで売っていなかったビールやワインも売っている。もちろん買ってホテルに持ち帰る。

■歴史文化の街

街の中心地はもちろんメディナだ。さすがにマラケシュは今まで訪れたメディナの中でも最も大きい。中に入るとまず目に留まるのは一際高い 77m のミナレット「クトゥビア」で、周辺にあるナツメヤシの木々を配下にしたような感じで悠然と建っている。

その中でも珍しいナツメヤシの木を発見する。高いスマートで真っ直ぐな木だが、よく見ると本物の木ではない。何と、携帯電話の基地局だ。街の景観を損なう事なく新しいものを導入している。このあたりの感性が歴史文化の街と呼ばれる由縁かもしれない。それは京都に似ているように思う。



【77m のミナレットのクトゥビア】



【ナツメヤシに似せた携帯電話の基地局】

「バヒア宮殿」はイスラム教らしく幾何学模様、ステンドグラス、豪華な部屋がたくさんある。何しろこの王様は正妻 4 人と妾 24 人がいたので、この位の広さは必要だったのだろう。

豪華なタイル張りの中庭のようなスペースで、一夫一妻制の私たち夫婦は記念写真を撮る。

四角い中庭があってここで面白いものを発見する。バナナの木にバナナの実がなっており、花が咲いている。私は生まれて初めてバナナの花を見る。



【バヒア宮殿の内部】



【宮殿の中庭 バナナの花は中央の赤い丸】

レストランに入る。添乗員からは事前にケバブ料理と案内されていたので、私は日本のイベント会場でトルコ人が売っている肉を円柱状に重ねて、焼きながら外側から削いで食べるものだと思っていたら、想像していたものと大きく違った。

簡単に言えば焼き鳥、あるいは牛串だろう。一口大の肉片を玉ねぎで挟んで串に刺して焼いたものだ。味付けも甘辛タレなので焼き鳥に非常良く似ている。

同じ焼き鳥だと考えると、私は塩と七味唐辛子をかけた日本の焼き鳥の方が好きだ。



【ケバブ】

■エネルギーッシュな街

王宮の門を出て少し歩くと、「ジャマエルフナ広場」に出る。ここは広い広場で、とにかく雑踏が凄い。たくさんのテントが並んで色々な品物を売っている。品物だけではなくテントの中では簡易な食堂もあって様々なものが食べられる。テントがないところでは露店で店を開いてコンクリートに直に品物を置いて売っている。本日は週末でもないのに夕方になるにつれてどんどん人が増えてくる。



【夕方のジャマエルフナ広場】

物売りや食堂以外に民族音楽の演奏、サル回しにヘビ使いもいる。私はヘビ使いなどというものは映画や昔話の世界だけかと思っていたが、現実に目の前のヘビ使いが吹く笛の音に反応してキングコブラが頭を持ち上げて戦闘体勢をとっている。それは極めてショッキングな光景だが、このヘビ使いたちは何を商売にしているのか。ガイドはヘビと一緒に写真を撮らせることでお金をもらっているという。

すると、そのヘビ使いに近づいて行くツアー客がいる。そしてお金を払ってキングコブラと記念撮影をしている。さすがに私にはその勇氣はなかった。



【ヘビ使いとキングコブラ】



【スークの中】

メディナの内部でひと際込み入った商店街はスークと呼ばれている。スークはフェズのメディナに似ている。ただこちらのスークの方が規模は大きい。フェズの通路は人とリアカーしか入れなかったが、こちらは車も中に入ってくる。通路が広い分、人も多く混んでいる。

日が暮れるにつれて大勢の人が現れて、さらにエネルギーになっている。

モロッコ最後の夕食はスーク内にあるレストランで食べる。モロッコに来て今までの夕食は全てホテル内のレストランだった。それはツアー客の疲労度や安全性を考慮してのことと思うが、さすがに本日は最後の晩餐なので今までとは違い豪華なレストランで民族音楽の生演奏も付いたコース料理になっている。ちなみに今までのホテルの朝食はもちろん夕食もビュッフェスタイル、日本式に言えばバイキング形式だった。

料理を待っている間に飲み物が運ばれてくると、各テーブルからは「乾杯!」、「お疲れ様でした!」の声が上がる。皆なごり惜しそうだ。

出てきた料理はもちろんモロッコ料理で、高級感がある。クスクスは野菜が彩り豊に並んでいる。タジン鍋の主役は肉ではなくイワシが入っておりオイルサーディンのようで美味い。デザートのアレンジは砂糖が少しかかっているがなかなかいける。



【彩り豊かなクスクス】



【サーディンのタジン鍋】



【デザートのアレンジ】

レストランを出ると既に暗くなっており、街の景色は様変わりしている。人々の熱気はさらに高まり、街は躍動しているように見える。上を見上げると屋上のレストランのようなところで人々は盛り上がっている。アルコールを禁じているイスラム教の国なので、ビアガーデンではないだろうが、十分に熱気が伝わってくる。



【夜の屋上のレストラン】

ホテルに戻り、シャワーを浴びてベランダでビールを飲んでいると、何台ものバスがホテルに戻って来て欧米人のお客を降ろしている。もう夜の 11 時になろうとしているのに、この時間までジャマエルアナ広場に居たのか。やはり欧米人はタフだ。

■ 帰途

最終日、バスはマラケシュから北上してカサブランカに向かう。その途中には緑の小麦畑が延々と続いている。やはりモロッコはアフリカ大陸の中では裕福な国なのだろう。

カサブランカからドバイ行きの便には白い服を着たメッカ巡礼の御一行様が大量に乗ってくる。ドバイで乗り換えてサウジアラビアのメッカに行くのだろう。

メッカ巡礼はイスラム教徒にとっては一大イベントで、裕福な人はもちろん、貧しい人でもお金を貯めて一生に一回は行くという。仏教でいえばインドの四大聖地の巡礼に行くようなものだが、日本の仏教徒の宗教観とはだいぶ異なる。

帰りの飛行機でも充分過ぎるほどに時間があるので、映画を何本も観る。エミレーツ航空のエンターテインメント機器は最新で、機能はもちろんのこと映画の本数もその内容も充実している。

「小野田 (Onoda)」は第二次世界大戦の日本兵が戦後約 30 年間、フィリピンのルバング島で抗戦を続けていたという実話で、大日本帝国の徹底的な国家忠誠教育がもたらしたものだ。30 年もの間、彼は何を求めて生きていたのだろうか。

「PLAN75」はフィクションの意欲作だ。日本は超高齢化社会になり、国が取った政策がえげつない。このまま高齢者を養っていくと国が破綻するから 75 才以上の人は安楽死を選べる法律を作った。国家や若者のために死を選んで欲しいというある種の高齢者再教育を行う。主人公の老婆 (倍賞千恵子) も安楽死を考えるが……。これも生と死をテーマにしている。

英国映画「The Forgiven」はモロッコが舞台なので見て来た光景が写し出される。砂漠で現地の若者を飲酒運転の白人の主人公がはねて死なせてしまう。不可抗力の事故として隠ぺいを図るが、若者の父から埋葬に立ち会って欲しいと言われ、同行して彼の価値観が変わっていく。

どれも重いテーマの映画だった。

そしてモロッコは映画との関りが非常に深い国だったと改めて思い出した。

第六章 旅を終えて

■反省日記

今回は、久しぶりの海外旅行なので反省点や改善点があり、それらを記しておこう。

- ・3月上旬なので暑くはないだろうと半袖を持参しなかった。しかし暑い日もあり、多くの人が半袖を着ていた。Tシャツ1枚でもいいから下着を兼ねて持って行った方が良い。
- ・最近のホテルは無料 Wi-fi が用意されているが、ホテル以外で地図を見ることや調べ物をするためには Wi-fi ルータ持参も考えた方が良い。ただし旅先で用事もないのに日本と連絡をとるためならただけでない。旅は非日常を楽しむものだ。
- ・レストランでデザート等を持ち帰るためにラップを持ってきた人がいた。これはかなり重宝な気がする。防寒グッズにも使用できるとその人は言っていた。

■旅の記録

実施は2023年2月28日(火)～3月9日(木)の9泊10日、その行程を以下に示す。本文の記述順番と多少違う部分もあるが、以下の行程の方が正しい。

- ・1日目 16時自宅を出て成田空港、22時30分発エミレーツ航空でドバイへ(12時間)
- ・2日目 ドバイからエミレーツ航空でカサブランカへ(8時間45分)
13時(現地時間)カサブランカ着、カサブランカ市内観光に出発
ムハンマド5世広場、国連広場、ハッサン2世モスク、ラバトへ
ホテルヘルナンシュラー(HELHAN CHELLAH)にチェックイン
ホテルでビュッフェスタイルの夕食、
- ・3日目 8時ホテル出発、ラバタ市内観光でウダイヤのカスバ、ハッサンタワー、
モハメド5世霊廟を見物後、シャウエンへ移動後レストランでケバブ料理の昼食、
シャウエン散策してホテルパラドール(PARADOR)にチェックイン
- ・4日目 7時45分ホテル出発しフェズへ、ブージュエルード門をめぐりフェズのメディナ
(旧市街地)を散策、リアド(邸宅風)レストランでタジン料理の昼食、
皮なめしと洗濯場と革製品販売店、ブーイナニア神学校、民家でミントティーを
飲み建物内見物、マリーン朝の墓地(みはらしの丘)からフェズを展望
19時フェズのホテルメンゼザラ(MENZEH ZALAGH)にチェックイン
ホテルでビュッフェスタイルの夕食

- ・ 5 日目 8時にホテル出発し、イフレンの街並みやバーバリライオンの像を見物して、アトラス山脈の標高 2160m サード峠を越え、ミデルトのカスバ風レストランで鱒のホイル焼の昼食、ズィズ溪谷、ズィズオアシスを見物
18時エルフードのホテル パームズクラブ (PALM 's CLUB) にチェックイン、ホテル内でビュッフェスタイルの夕食
- ・ 6 日目 4時 45分モーニングコール、5時 30分に 4WD 車に分乗してホテル出発
6時 10分メルズーカのラクダステーション到着、6時 30分にラクダに乗り出発
サハラ砂漠の日の出鑑賞し、9時 10分ホテルに戻り朝食
10時 15分ホテル出発し地下水道の溝、ティネリールのエラシナレストランでタジン料理の昼食、トドラ溪谷を散策、バラ製品店に立ち寄り、ワルザザード着
ホテル ケンジアズゴール (KENZI SAGHOR) にチェックイン
ホテルにてビュッフェスタイルの夕食、
- ・ 7 日目 9時ホテル出発、タウリウトのカスバ、オスカースタジオ、ティフルトゥトのカスバを外から見物、世界遺産の要塞村のアイットベンハドゥに入場、
昼食は近くのレストランで食べ、アトラス山脈 2260m のティシュカ峠を越え
アルガンオイルの販売店に立ち寄り、マラケシュに入る。
18時ホテル パームプラザ (PALM PLAZA) にチェックイン
ホテルのレストランにてビュッフェスタイルの夕食
- ・ 8 日目 9時ホテル出発、マラケシュ市内観光でジャマエルフナ広場、バヒア宮殿、
スークを散策、ジャマエルフナ広場の近くレストラン「ナイアガラ」で
ピッツアの昼食、ホテルに戻り休憩、再度 18時ホテル出発、
ジャマエルフナ広場近くのレストランでタジン料理の夕食、21時 30分ホテル着
- ・ 9 日目 8時バスでホテル出発、12時カサブランカ空港到着、
15時 05分エミレーツ航空でドバイまでフライト (7時間 25分)、
- ・ 10 日目 ドバイから成田までエミレーツ航空でフライト (9時間 25分)
17時 20分成田空港着、22時帰宅

全 10 日間だが、飛行機の移動時間があるので実質的には 7 日間、その間に現地で撮った写真は全部で 1550 枚、この旅行記にはその約 4 パーセントにあたる 63 枚の写真を掲載している。

総費用は 2 人で約 86 万円、1 人あたりはその半分の約 43 万円になった。

- ・ 旅行費用 606920 円 (2 人分 阪急交通社に支払い)
- ・ サーチャージ 208060 円 (2 人分 阪急交通社に支払い)
- ・ ラクダツアー 約 11700 円 (2 人分、US \$ 45×2)
- ・ 土産物や食事の飲み物代 約 25000 円 (2 人分)
- ・ 国内交通費 約 10000 円 (2 人分、自宅～成田空港往復)